

風 韻

三十五周年記念号

第 8 号

(1968年度)

神戸大学風韻会



「頼政」 宇治正夫師範
 (昭和42年5月 於上田能楽堂)

風韻 第8号 目次

五十年の体験	宇治正夫	1
本業と余技	藤井茂	3
<u>研究室</u>		
o サークルの意義		5
o 三大学交歓会		8
	一橋大学 佐藤佑治	
	大阪市立大学 杉野晟二	

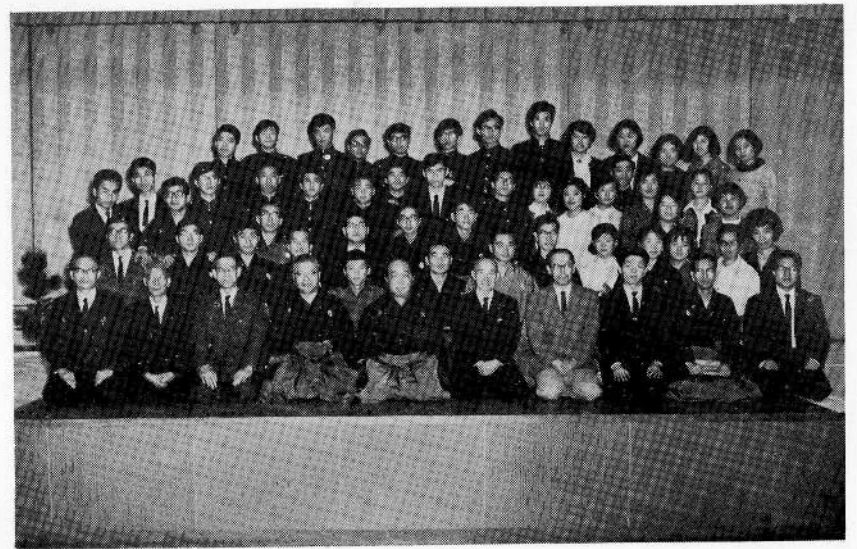
三十五周年特集

神戸大学風韻会の歴史	10
あの日あの時	12
南 盛雄 石田謙一 岩岡正彦	
和田 慎三 里井三千代 原 敏郎	
近藤 哲久 大林 治郎 五十嵐勝三	
才3回秋季発表会(35周年記念議会)	17

「先輩便り」	18
井口 宗敏 伊藤 欣二 林 哲夫	
私の提言	20
高尾浩子	
<u>レポート</u>	
・シテ一人主義	21
内海 隆彦	
・おもいづくまま 一能芸論の為のメモ	24
上野 圭輔	
・幽玄について	26
中西 治嘉	
風韻春秋	31
安藤 幸雄 戸田美代子 岩崎 勝至	
風韻会のあしあと	34
幹事長就任にあたって	35
中島 克己	



第 1 6 回 卒 業 生



3 5 周 年 記 念 誦 会
 昭 和 4 2 年 1 1 月 1 8 日 於 神 戸 大 学 学 生 会 館

五十年の体験

(その四)

師 範 宇 治 正 夫

誦の稽古には形を先にする人と実を先にする人がある。そのいずれをとるかはその人に依るが、いずれにしても稽古を始めて少し熱心に二、三年も続けると大体節の上げ下げも自由に出来るようになり一応の形は整うが更に数年を経ると、自分の耳の方が進んでどうも思うように誦えないとか声が出ないとか兎角自分に満足出来ないと言う事は益々伸びる前兆とみて差支えない。という事は形よりも内容が大切な事に気付いた故に外ならないからである。魂の籠った誦をこめて精進を続ければ内容の充実は疑いない。

それとは反対に自己満足の結果得々として相手構わず説教じみた事を云ったり威張ったりする型の人があるが、こう云う人は正しい節や調子を教えても仲々受け取り難いものである。甚しい人は先生の云う事は聞いても心にとめないのか、いろいろな解説本等を見て研究を続け勝手に自己流を築きあげて益々脱線する人を見受け、嘆かわしく思うのであるが、或る程度の所迄進むには自己を空しくして指導に従い捉われない心境になっ

てからいろいろ本をみるようにして貰いたいと思う。
何事も捉われる間は駄目である。自己満足は要するに自分だけのものであって、人を喜ばせ得るものではないが、もう少し良い謡を謡えないものかと絶えず、自分を責め精進を続けている人は何時かは人を感動させ得る境地に達するものである。毎日趣味として謡う謡に魂が這入るようになれば所謂「三味境」に入り、人をも喜ばせ得るようになる。魂のこもった謡を宇宙に向って送り得るようになったら誠に尊くも亦、楽しい事ではなからうか。

本業と余技

会長 藤 井 茂

一
神戸大学風韻会が三十五周年を迎えた。わたくしが大学を卒業した年の昭和七年から宇治先生を正式に師範にお迎えして、会の名称もそれまでの鞍馬会から風韻会に変ったわけである。わたくしは卒業と同時に母校に助手として学問生活に入り、同時に個人的に宇治先生に入門して謡曲の御指導を受けることになった。本業としての学問と余技としての謡曲とが同時にはじまったわけである。それから三十五年余、どちらも続けている。思えば長い年月であり、また思えばアツという間に過ぎ去ったような気もする。

学問の方が続けられたのは当然のこととしてしばらく措こう。謡曲が続けられたのは全く宇治先生の御蔭であると感謝している。戦争中もずっと続けたことは今でも尊い思い出である。わたくしはこの間に宇治先生に謡曲を教わっただけでなしに随分いろいろな事を教えられた。その中でも、先生から本業の心構えを教えられたことは、今もわたくしの座右の銘として日夜反省の鏡としている。

も始まっていた頃、ある若い内弟子の方に地を謡ってもらったことがある。歳不差から考えて、その謡歴がそんなに長くない筈なのに素人の到底及ばないものをもっておられるのに感嘆した。他日、宇治先生にこのことをお話し、「玄人と素人とはどうしてこうも違うのでしょうか」と尋ねた。先生のお答えはつぎのようであった。「玄人は舞台で間違えば楽屋へ入ったとたんに、きびしく咎められる。素人は舞台で間違っても、楽屋へ入れば「結構でした」とほめられる。そこが違うところですよ」先生のこの何気ない答えにわたくしははたと膝を打って深く肯いたものである。本業には常任座臥、生命が賭けられている。余技にはそれが無い。余技は所詮余技であり、それ以上であることは出来ないし、それ以上であってもならない。

二
ずっと昔、恐らくは三十年も前のことであつたと思う。九番習い

三
わたくしの本業は学問である。学問の世界においてわたくしは些かの甘えも許されない。不断の精進と生命を賭した真剣さこそが学問を本業と呼ぶにふさわしくするものである。わたくしはそれ以来

ともすれば易きを求めようとする心を叱りつけてきた。

それとともに、わたくしは本業たる学問以外は一切余技として、せいぜい趣味の程度にとどめようと思い定めた。とくに熱も上げずさりとして冷えもせず、わたくしの謡が永続したのはこの為めであったと思う。

しかし、これは余技を軽く見る意味ではない。余技は余技なりに努力をすれば上達もし、素人は素人なりに謡のもつ味わいが深まってくる。そしてそれがまた一つの悟りともなつて本業たる学問への支えともなる。とくに感性を主とする謡は理性を主とする学問とは異つた世界であり、生活にうるおいを与えるという以上に、人間形成の上に大きな栄養素となつたと思つてゐる。

四

本業と余技を併行的に進め三十五年。余技の方は時に怠り、時に忽せにして今なお未熟をかこつばかりである。たまたま、宇治風韻会の五十周年記念というので、近く、社中の大会で大曲道成寺のシテを謡わして頂くことになつてゐる。自分の力に過ぎた大役であることは重々承知してゐる。しかし、この大曲に全身を打ち込んで、謡曲の真髓の一端にも触れられれば幸であり、さらに芸道の奥の深くして素人では到底窺いえないものであることを思い知りうれば尚更幸であると思つてゐる。

漱石は「虞美人草」の中で、「悲劇は喜劇よりも偉大である」といつてゐる。悲劇が生命を踏するがゆえに偉大であると思つれば、さ

誌 上 研 究 室

● サークルの意義

一年の最大の年中行事である秋季発表会も終えて一息ついた十二月のある日、二・三年が集まつてミーティングを開いた。議題は「サークル論」——サークルのあり方をもう一度あらためて見なおしてみようというのが、その主なねらいであつた。議題はこの文は、そのミーティングの結果をまとめたものである。

先ず最初に「サークル」の意味をはつきりと把握する必要がある。この言葉は非常に広い意味範囲をもつており、正確に規定することは困難であるが、ここでは一応、「何らかの一定の目的をもつた、複数人による小集団」ということにおこす。

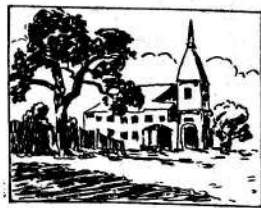
近年、「高度の文明化、巨大な社会機構によつて、人間性が失なわれ、人々が次第に疎外に陥り、孤立化してゆく。」とよく言われる。そして、それらを克服する場として小集団が注目されるようになった。

サークルがそのような性格をもつのは事実であるが、そのことはさておき、現在の神大風韻会に限つて、いくつかの問題をとりあげてみよう。その際に、(一)個人の問題、(二)全体の問題、(三)個人と全体の問題の三つに分類して把握するのが便利であると思ふ。

(一) 個人内の問題

神大風韻会は、言うまでもなく「能芸術の理解」を目的とするサークルである。このサークルの中で、各個人がサークルに対してその意義をどこに認め、また求めているかによりこの問題は各人様々に異なる。ここでは個人の主体性が必須であり、この主体性によつ

しずめ、本業は悲劇であり、余技は喜劇であるともいえよう。しかし、喜劇にも涙があることを思えば、余技は余技としてまた偉大であるといふことができるであらう。(昭和四二年十一月十三日)



て、各自が自分で解決しなければならぬ問題である。例えば、踊・仕舞に対する心構えや、自分が今どうしてこの風韻会に居て、それが何の役に立つのか、言いかえれば、サークルの自分個人に対する意義づけの問題である。ある人は言う。「サークルは強制されたものでないだけに、自分を楽しませ、試すのにもつともいい場所であり、安息・憩いの場所でもある。」と。またある人、「この頃氣づいたサークルにはいつてゐる事の良さとして、人と和してゆく心を養うという事がある。一方的に妥協していつて自分を失うというやり方ではなく、自分をしっかりとちつつ、人と和してゆく態度である。このような態度をサークルの中で育てたいと思ふ。」

また、情性に流されそうになつてゐるのを必死でくい止め、サークルが逃避の場とならぬよう頑張つてゐる人も居る。

このような問題はサークル員各自があくまで自分でぶつかつて考えなければならぬものである。しかしながら、現在の風韻会のサークル内では、個人がいくら考えていてもそれを気軽に友人と話し合ひが出来る機会・雰囲気は乏しい。少しづつではあるが最近三・四年生間にそのような空気が出てきたことは、望ましい傾向と言えよう。このような方向をもつと推しすすめてゆく必要がある。

(一) 全体としての問題

大学のサークルは、社会的責任又は使命を持つているとよく言われる。これを我が風韻会にあてはめてみた場合、謡・仕舞の性質上もしあるとすれば、それは価値ある伝統芸術をひろめ、その芸術の支持層を厚くしてゆく作業につきるであろう。これについてはいろいろ意見のわかれる所である。すなわち、我々学生の拙い技量をもって、能をまだ一度も見たこともないような一般大衆(学生を含めて)に、その本当の美しさを理解してもらえるかどうかは疑問である。したがって、社会へのアピールなどをおこがましい事と考え、または不必要だとする意見。又、我々は学生という特殊な立場にあり、次の世代を担う人間である。日本古来の伝統芸術たる能のよき理解者として、それがもつ不合理性を解消しながら、能を継承発展せしめることは我々サークル員に課せられた任務であり、不断の我々の学術的研究活動及び実演を通じ、社会に対する啓蒙運動を重視する意見とがある。当然、前者にあつては学生として積極的な姿勢を失っており、自ら否定的になつているといわねばならない。

確かに、能という芸術は高度に抽象化、象徴化された美には違いない。しかしその美たるや、普通よく言われるように能あるいは謡曲・仕舞をやつたことのある人へのみ享受され得る性質のものであるか。勿論、人の美意識には個人差が存在する。従つて、一律に誰も彼もに能の芸術性を認めよと要求し、一方的に社会へアピールすることは無益なことなのである。ここに流動的・多面的な啓蒙の必要が生ずる。またこの点に注目するならば、我々の唯一の単独発表会である秋季発表会に於ては、これを我々の年間活動の頂点とし

も、サークルとして集団で活動する限りは、最小限度の規律(時間的制約・役職の責任 etc)は守らねばならないのは当然の義務である。

(二) 全体と個人との問題

サークルを維持してゆくために、一定の規律というものがある。そこでおこつてくるのが、全体の統制と個人の自由の問題である。もとより、サークル員はそのサークル内の規律はまもらねばならない。しかし問題は、サークル員がサークル活動とその個人がより有意義と感ずる他の活動との選択にあつて、どちらを選ぶかということである。結論を先に述べれば、それはサークル全体としてはどうしようもない問題である。結局その個人の価値判断にまかせるより外はない。とはいえ、大学サークルの活動はある程度統一的(最大限四年間個人は活動を継続する)であり、その範囲内でサークル活動を続けながらも、他のやりたいことを併行的に、しかもその大部分をやり得るとはいえよう。

以上、便宜的に三項に分けて考察してきたが、これらは他の要素も加わつて渾然一体となつており、その状況のもとに神大風韻会は運営されているのである。従つて、その中にはここでとり上げた外にも多くの問題が顕在し、また潜在している。我々は常に問題意識を持ち、これらの問題を解決する努力を着実に続けていかなければならない。(N・Y)

観客に対して、謡曲・仕舞等の実演のみならず音楽研究成果の発表を行い、その観客動員に因しては、出来る限り即事的・多面的な働きかけを行う必要がある。

本来、人間の行動には常に目的がある。目的でない人間の行動はない。しかしその目的が自覚された時に初めてそれが目的としての意義を持つていた。そして、それが自覚されない段階においては、その行動は無目的なものと言われる。数ある年中行事、とりわけ対外的な議会が低調に流れ、情性に流されているのは、此等の会の本来の目的(多分「各校との親睦・交歓」と「技芸の比較・鑑賞」ということにならうが)が明確でなく、仮令示されたとしても、それが本当に各サークル員各自の目的として定着し得ないからである。会の発展、それを生気あるものにするためには、その目的をサークル員が各々自己のものとしてとらえることが必要だと言える。このことは従来から言われながら、未だ解決を見ない問題の一つである。あるいは、目的それ自体に欠点があるのかも知れない。

目的ということについて別の観点から見れば、種々の行事については究極的には利己であるが、行動そのものが目的であるとする立場もある。風韻会活動についてみれば、謡うこと、舞うこと、それ自体に目的を見いだすのである。対外的な会について言うならば、自分の出演する時間に会場へ行き、自分の舞台が終ればそのまま帰つて来るのである。この立場にたてば、謡い舞つておれば何も問題はないのだ。即ち、集団としての、また大学サークルとしてのサークルの意義を副次的に考え、常に前述のサークル意義第一主義者と対立する立場である。しかし、いかに後者の立場をとる者であつて

カーネーションのある銀行

H

阪神相互銀行

神戸市生田区三宮町2-18 電 大代(33) 8141

使いながらふやしていくたのしみ

みなさまの

イチワリ貯金

兵庫相互銀行

三大学交歓謡会 の意義

佐藤 佑治 (一橋大学)

本大会も今年で11年目を迎えた。今年は特に開催に際し、さまざまな問題点が指摘されたにもかかわらず、5月3・4日一橋大に於て盛大に挙行された。「風韻」発行にあたり意見を求めたところ、本大会に關し一橋大観世会と大阪市大より原稿がよせられたので紹介したい。各校の寄稿を要約すると次のようである。

一橋大は主催校として本大会の反省点をあげている。この点は主催校の対策のみならず、他校の協力こそ大切かと思う。最後に今後の対策と展望をあげ、積極的な意見を出しており、本大会の新しい発展を現役の者達が見出すことを強調している。地理的に負担の大きい一橋大が積極的姿勢をみせている事は注目したい。

大阪市大の方は問題点を指摘している。内部的な事情による点が大きいようであるが、現役部員の大会の趣旨あるいは意義についての意見が変化している点をあげ、いわば消極的な姿勢である。しかし市大にしても現状打開対策を模索する方向にあり、三校がもう一度新時代に向つての共通の基盤を見出す必要性があることを指摘している。

これに關して我神大も現役部員の意見をまとめ本大会の趣旨や今後の展望性を見い出さねばならない。(K・Y)

(第三) 当日の「話し合い」は、良い企画であったが、数の多い二・三年生は、数班にわけるのが良いと思われた。せいぜい一班15人が限度であろう。

(第四) 大会の時間運営がうまくいかなかったこと。これは一橋のプログラム作りのまずさの為であるが、他校の番組には、持ち時間をオーバーしたのもあったので、必ず持ち時間は守るようにしたい。蛇足だが、午前の「話し合い」のリラックス・ムードが午後の大会に迄持ち越され、夕方近くには、疲れがたまりして余り「お行儀」が良くなかったが、これは厳につつしみたい。

今後の対策と展望

(第一) 幹事間の打ち合せ、協議の拡充。

(第二) それぞれの部誌に三大学使い、意見欄を設け、意見の交換の場を作る。

(第三) シンポジウム。これは話の出ない雰囲気を作る為にも一番よいのではないかと思う。但し当番校が余程テーマについて選択、勉強をしておかないと、ただの「教養」になりかねない。

(第四) 合同合宿の実現。今回は都合により実現できなかったが、年一回でやれることには限度があるので、これからの三大学大会を伸ばしていく為にも、これは必ず最大かつ緊急を要する問題である。時期については、春休みより夏休みの方が良いだろう。

以上、色々述べてきたが、結局当番校が趣向をこらし、数年すればよいものは残り、悪いものは消えていくのだから、おそれず、どんどん新しい企画をとり入れていくことであろう。この際、先輩とか先生に気をとられる必要は全くないし、又気をとられていては何もできないということを述べておこう。今後の大会は、今迄が問題

まず最初に、神戸大学風韻会の35周年、本当におめでとうございます。ところで我クラブにおいては、あの大会の後、今後共大会に参加していくことを全員一致で決定しました。まずこれを報告しておきます。

はじめに

私はここでまず、今回の大会の反省をし、次に今後の対策と展望について述べますが、これは「ひとつばしかんぜ」(第5号)をふまえているので、是非それを参照して下さいは幸いです。ですからそこで出された問題は殆んどはふき、ここではそれ以外のなかで主なものを述べてみたいと思います。

今回の大会の反省

(第一) 大阪・神戸両校が揃ってこれなかった事。これは、三校の中の二校の交流をまず少しでも深める為には、良い機会であったので必ず実行して欲しかった。どんなに小さなチャンスでものがさぬようにする心構えが、年に一回しか会えない我々には非常に大切である。今回は、両校の事前の連絡が密でなかった為ですから、今度上京される時は失敗せぬように。

(第二) 申し合せの後に行った討論会が極めて退屈なものとなったこと。これは事前の各クラブ毎の討論が殆んど行なわれていなかったことによるのであるから、是非、今後→今年はどういうことが問題なのかを長い歴史の中で捉えるようにして、各クラブ毎に話し合っておいて欲しい。それは幹事会にも役に立つことですから。

なのではなくて、これからが問題なのだから。前進!

杉野 晟二 (大阪市大)

三商大の大会が始まったのは、一昔前である。この長い伝統を持つ大会の存在が、今や我々現役部員にとつて重荷となりつつある事は、疑う余地のない所であろう。発足当分の情熱が全く失われ、ここでは大会の持つ意義を何とかして見つけ出さねば大会の存続すら危ぶまれているのが現状である。ところで、大会を存続する上での矛盾が今年程表面化した事は、ここ数年なかったのではないか。年々新しい部員が入り、古い部員が出るにつれて、伝統ある行事に対する考え方にも変化を生ずるのも、やむを得ぬようである。今の我々は他校と競い合つて云々という情熱を持っていないようである。

まして昔のように、強いライバル意識、連帯感にも乏しい。各校がただ自校の内部をまとめ、行事を消化するのに窮々しているのが現状ではないか。あえて大会の持つ意義を見つければ「親睦」という言葉がまず頭に浮かび、一番すなおに入れられそうである。ところが「親睦」なら、遠い所で求めなくてもいいのじやないかという反論がなされる。確かに道理である。「親睦」以外何も求めるものがないのなら、この大会の運命も間近に迫っている。伝統を生み出す事は困難である。それを破壊する事も困難である。しかし、矛盾を含みながらそれを維持する事は、さらに困難な仕事と言えよう。今年、話合われた意義なるものも、「親睦」の域を脱しなかつたようである。ここで結論らしき事を述べる事は出来ない。ただ後輩の為にも、このあたりで何とかする必要がある事だけは、確かであらう。

三十五周年特集

神戸大学風韻会の歴史

高木 一

神戸大学風韻会が結成されて今年、はや三十五周年を迎え、また、三十五年の歴史を回顧することは風韻会の今後の活動に、若干の参考になると思われるのでおさげではあるが以下その歴史をたどってみよう。

風韻会の前身は鞍馬会である。この会は相当古い歴史を有した様である。しかしこの会に関する文献資料が手許にないため詳しく述べられないのは残念である。この会の名称の由来がふるっている。その当時の伊勢普宣師範によると、謡曲部のメンバーが皆、自分自身が一番上手だと鼻の高い天狗共の集まりであるところから、鞍馬天狗よりとって「鞍馬会」としたそうである。当時この会他に、宝生会、喜多流喜松会が存在し、互いにその技を競っていたのである。又、昭和五年には大阪商大（民謡会）、関西大学（能楽会）、関西学院大学（観声会）、神戸商大（鞍馬会）の四校が集まって関西学生連合謡曲会が結成された。これは後の関西学生能楽連盟の草分けともいえる。一方昭和七年商大専門部昇格とともに、クラブも心機一転して出直そうという運動がおこった。国重猛、高崎貞男、生田八郎、田岡映好氏が奔走され、新師範として宇治先生を迎え、

に至っている。四十二年は一橋大学の謡曲活動の停滞によりその開催が危ぶまれたが、当番校であった当校の義務感によりどうか、開催された。十年以上続いてきたこの交歓会はその転機に直面しているようである。

六甲台に於いて風韻会が再び戦前に劣らぬ活況を呈していた時、新制神戸大学が発足し、姫路と御影に教養部分校が設置された。この姫路分校に於いては都留好子先生を中心に、「紅葉会」が活動し昭和三十四年には第一回紅葉会、風韻会交歓謡会が行われた。その後姫路分校は昭和三十九年を最後に廃止され、鶴甲に教養部学舎が統合され、ここに現在の風韻会鶴甲支部が誕生した。

昭和三十五年には対外活動も活発となり、奈良女子大学との合同発表会、神戸女子薬大との合同発表会が新たに生まれたが、前者は昭和三十八年まで続いた後いつのまにか立消えとなり、一方後者は甲南大、神商大を加えて、「四大学交歓会」に発展し今日に至っている。

昭和三十七年には、大学祭の閑遊会に於いて串カツ専門の「狸々」店を開き、風韻会の年中行事の一つとなった。町の串カツ屋よりうまいという評判をとり、毎年「狸々」店を訪ねてくれるファンも出てくる。四十年には第一回秋季発表会が開かれた。四十一年には関西学生能楽連盟主催のコンクールで久々に二位に入賞し、宇治師範、先輩始め、クラブ員こそぞって入賞を喜びあったのだ。昭和四十二年には関西学連謡曲会が、学生会館にて催れ、同年十一月末に宇治先生主催の風韻会創立五十周年記念謡会が盛大に行われた。

以上おおまかに神戸風韻会の歴史をながめてみたが、なにぶん文献資料不足のため、正確を期しているとはいえない。乞御助言を

会の名称も神戸商大風韻会となった。これが今日の神戸風韻会の母体である。

一方筒井ヶ丘から六甲台へ学舎が移転した頃、現在の風韻会の教授グループの謡会（翠謡会）が藤井教授を中心に盛んに行われた。その顔ぶれは、八木、白杉、川上、金田、花戸、古林、柚木、丹波佐野、加藤、生島教授等の錚々たる方々ばかりであった。折しも日本は日華事変を契機として、戦火を拡大し、遂に大東亜戦争に突入した。学生の話の稽古も自然に中止となり、学生の大部分が出征したのだった。ここに出征謡会が開かれるようになった。十七年から十九年にかけて、「聖戦完遂祈願謡会」「戦勝並出征将士武運長久祈願式挙行、出征社中武運長久祈願」などの謡会が催された。

戦後桑原先輩を中心に、風韻会の活動がいち早く再開される。数ある六甲のサークルの中では風韻会が一番先に復活したのである。この時、先の教授グループの若手ともいふべき、米花、荒川、山瀬則武、向井の諸教授が新たに、風韻の心を訪ねられたのである。

昭和二十五年には神戸経済大学、神戸女子薬学専門学校（これも風韻会と称していた）の合同卒業謡会が行われ、この関係は、その後数年続いた。昭和二十八年には、神戸大学創立五十周年記念謡曲大会が宇治師範を中心に、盛大に行われた。一方四校連盟から漸次発展を遂げてきた関西能楽連盟も前記四校の他に阪大、甲南大などが加わり、計九校を擁し、昭和三十年にはコンクールが始まった。昭和三十二年には二位となりその後数年入賞するという活躍ぶりであった。昭和三十一年には一橋大学観世会及び宝生会、大阪市大、神戸大学風韻会及び宝生会とでもって三大学交歓会が開かれて現在

祝風韻会三十五周年

二 郎
欣 敏
藤 原
伊 原

酒類、醬油、味噌、食料品問屋

株式会社 金星

取締役社長 鈴木春男

東京都中央区新川1丁目10番地
電話 築地(552) 2351番 (大代表)

風韻会あの日あの時

「光陰矢の如し」とか。この三十五年間に神戸商科大学風韻会も神戸商科大学風韻会から、総合大学の全学部サークルへとその歩みが続けてきました。しかし、一口に三十五年と言いきれぬ感慨を胸にされた方も多々と思います。今も色鮮やかに浮かぶあの日あの時の風韻会——
こうした記録にあらわれない風韻会生活三十五年のアレコレを、十名の先輩にふりかえっていただきました。(A・O)

南 盛 雄

風韻会創立三十五周年記念の秋季発表会を催されるにあたってご案内をうけましたが、まず、その発展を心から祝福いたします。

発表会の豪華絢爛な番組を拝見しまして昭和七年から九年に至る小生等の在学当時の諸催しの事などが思い浮んで参ります。草創時代でもありましたので同好学生の数も今日とは比較にならぬ程すくなくかつたのですが稽古熱心さは相当なもので気魄がみなぎっておりました。例会も春秋二回開かれておりました。上筒井の旧学舎当時でありまして講堂を会場にしておりました。当時絢爛な番組といえは大阪商大(今日の大阪市立大学)、関西学院大学、関西大学それに我が校の四大学で組織しました関西学生連合謡曲大会での番組でありまして仕舞・舞囃子の外に関西大学からは狂言の出しものがありました。対抗意識で大いに稽古の刺激にもなりましたがうらやましくも思いました。

ともあれ、風韻会は、終戦直後の世情一般的な停滞はあっても非情な発展を遂げて今日に至っておりますが、その発展の根源はどこ

過ぎてしまいました。

二年生の時はマナーレジャーをやり、色んなスケッチャールの作成、種々の催しの折衝等に全く忙しい一年を送りました。

然しなによりも忘れられないのは練習が遅くなって夜の坂道を帰るとき、眼下に展開される百万ドルの夜景でした。これは今もほのぼのとした郷愁となっております。

昭和十七年応召により支那大陸各地を転戦しましたが纏て終戦となり、洞庭湖のほとりに約一年間の捕虜生活を送ることになりました。その間無聊なるままに羽衣や羅生門などの一節を書き綴り、戦友と語り合つたことは忘れられないことの一つになっています。

戦後数年間、熱を入れましたが、今は余りやっています。時々思い出しては一人であらうなっているのみです。(昭和十四年卒)

岩 岡 正 彦

今から考えると私達が居た六甲台の三年間は少くとも客観的にはかなり恵まれて居たはずである。

とに角これだけは誰が見ても素晴らしい場所に、せいたくに出来上った学舎で全学わずか六百名(従って毎日あの山へ上って居た学生の数は凡そ推量される)の学生が学園の内外に特別な風波もなく過ごしていたのである。

其処で私は商業大学という名の下で経済、法律、商学といったものを学んだ事になるのだが、どう考えても卒業したのは商大謡曲部である。

どうしてそんな恵まれた時代に勿体ない事をしたかというところ

にあるのかとふと考えました。そこでその根源は次のようなところにあるのじゃないかと思いました。先ず、歴年の幹事諸氏の会運営のために尽されたご努力、これは言うまでもないことですが、この長い年月ずっと宇治先生を師として仰いでいることと、藤井、荒川両先生を始め大学の諸先生方が多く本会に参加して稽古をなさっておられ、そこに一つの芯が出来ていることだと思えます。他大学には見られない事です。青年米花さんの当時のキビキビした仕舞振りが思い浮んで来て三十有余年の昔もつい昨今のような夢にしたります。(昭和十年卒)

石 田 謙 一

風韻会の名を聞くと、在学中御教授願った宇治先生、色々と御指導下さった藤井、丹波両先生に諸先輩、楽しく唸り合つた学友の皆さんがそれぞれなつかしく思い出されます。

今でも皆さんはそれぞれの分野で御活躍のことと拝察しています。松頼に和して聞える謡の妙なる調に魅せられて、風韻会に入ったのは入学間もない頃でしたが、追々と興が乗っていつの間にか三年が

論今から考えるとやはり若かったと思うが「中学・高校から入って一寸違和感があったのと、あまりにも親切に実学をたたきこまれたので学問に情熱を持たず、さりとてスポーツの方へ打込もうとして全学六〇〇名のメンバーでは、何をやってもレギュラーとして他大学との対抗試合に苦勞せねばならず、結局、他に何もエネルギーをぶつつけるものがなく、父が観世の謡曲・仕舞をやっているの「門前の小僧」的な素地はあり、風韻会に入った。さて風韻会の事となるとこれは凡て悔もなく懐かしい思い出ばかりである。

二年、三年を通じ幹事役をやつたせいか「謡う」ことだけでなく今でいう「クラブ活動」の凡ゆる楽しみと苦しみを味わった。関西五大学謡曲連盟の結成がそれらの会へのための合同練習の思い出：紙数に限りがあるのでテーマである「あの日あの時」を何か一つ書いてみよう。

あの頃学生会館に宇治先生を迎えて週に一回二時間位習い、曲は大体先生と幹事が適当に選んだが少くとも月に一番はあげたものだ。大学の授業料が年百二十円で宇治師への月謝は一月五十銭と記憶して居る。

技は未熟であつたろうが、何といつても私達は時間があり研究心は旺盛だ。

ある時「安宅」を習う事とした。敵は本能寺で目的は「観進帳」を覚える事にあつた。「安宅」は三級だから先生教えて下さつたが「観進帳」の独吟の所に来て「一寸此処は：：」という訳で、さしも学生に理解のある宇治師も恐れをなしてとほしけりという次第。さらばという訳で一同おさらばもそこそこ山を下り元町へ直行して楽器店へ入り試験室にたてこもって観世左近の観進帳を何回とな

く聴聞し、一かど覚えたつもりで得意になっていたものである。

その直後今は京都に居られる生島さんの御宅へ夜伺った所丁度藤井さんが(いろいろな先生方が風韻会のメンバーだったが特に高等学校の先輩であった生島さんには仏文学と文学としての能を教わり、大学の先輩である藤井さんには、直接教室で習わなかったが、会の大先輩として、又御近所づきあいもあって、今や学内外の大御所となられても失礼申し上げている)宇治師に勧進帳を習っておられて油をしぼられて居られるのを目のあたり見て、一足先に家元ぶりのさわりをマスターしたつもりになって居た事を冷汗三斗の思いをしたものである。

昭和十二年から三年間、六甲台はのんびりして居たが、日支事変勃発から欧州で戦雲が濃くなった頃の事である。(昭十五年卒)

和田慎三

もう十五年も前のことで、記憶も確かでないが、昭和二十七年の三商大に神戸女学院、神戸女子薬専などが加わった話会に「鶉飼」を演じた時のことである。ちょうど夏休みに練習をせねば間に合わないというので、当時神戸にあった大角氏(浅野スレート勤務)のお宅を拝借し、暑い中を大汗をかいて、ほとんど毎日懸命に練習したものである。大角氏のお母さんが、非常な謡好きで、食べ盛りの私どもに、おすしやおにぎりや西瓜など、それこそ毎回色々気を遣って何くれと面倒を見て下さったことを思いだす。

お蔭で練習も日一日と効果をあげ、全員の気持もこの上なく一致し、声の流れも極めてスムーズに最高の調子に達したと思った。そ

こで一度宇治先生に成果を聞いて載こうと一同張切って御教えを仰いだところ、先生は「全員の気持はピッタリと揃っているし、練習のお蔭で声の調子も良いが、残念ながら曲趣が全く出ていない。例えば「面白の有様や」の件りは節づけもリズムも良いので、それに酔って徒らに調子に乗り過ぎていく。この曲は鶉の哀れさ、鶉匠の空しさというものが出ていないと何もならない」とお叱りを受け若さに任せて走り過ぎるのを宇治先生の手綱でぐつと引き締められ、無事当日の話会は好評裡終ったことを覚えていく。

宇治先生の滋養に満ちた中にも厳しいお教え、大角氏とのお母さんの御好意、その時シテをやった瀧野氏(日銀)、保坂氏(山陽百貨店)などすべてなつかしい人々ばかりである。(昭十八年卒)

里井三千雄

先日、東谷晟君(三十一年経営学部卒。第一銀行日比谷支店勤務風韻会同期生)と久し振りに新宿で会った際、神大風韻会の事に話が及んだ。

先輩の大角征矢、織田正剛、熊野博氏等が何れも在学中であるので、「東京風韻会」でも結成して、時折話会を開こうじゃないかと思いが一致した。しかし東京勤務となつて以来、すっかり御無沙汰してしまい、稽古はおろか折角買い求めた「観世流・声の百番集」も何時の間にかレコードをかけることなく、書棚に積んだ儘になっている仕末で、話会をやるうとは誠におこがましい話である。

さて、編集子から風韻会の想い出話を書けとのこと依頼で、何を書こうかと東谷君に相談したところ、城崎での合同練習会が最も懐しい

から、その事を書いてはとの勧めがあった。

昭和二十九年の夏季休暇を利用して、関西学院大学との協演合宿が城崎で行われることになり、風韻会よりの出演曲目は「天鼓」と決定、部員一同猛練習に入った。真夏の城崎温泉の旅館で、浴衣がびっしょりになりながら、力一杯練習した。謡曲としての技術は未熟だったかも知れないが日頃宇治先生から教えられた「学生らしい素直な真摯な謡」をモットーに頑張った。終演後のあの清々とした感激は今でも忘れられない。

最近、合宿練習など実施されているのかどうか知らないが「風韻会」を通じ会員同志の友情を深め合う機会には貴重なものと思う。出来る限り、このような機会を作られることを後輩諸氏におすすめる。

卒業以来、既に十一年余の歳月を過ぎていくが、風韻会が永年の伝統の上に宇治先生の変らぬ御指導の下に益々多くの会員を擁し、発展されていることは誠に喜ばしく、今後共現役各位の御健闘を祈る次第である。(昭三十一年卒)

原敏郎

風韻創刊号が発行されたのは、昭和三十六年三月で私達九回生の卒業記念となった事はいさか感激深いものがあった。風韻会が現役学生の活動の場であると共に卒業生にとっても、いつまでもなつかしい思い出の場であって欲しい。私の風韻会に対するそんな気持ちから、最初は会員名簿の整備を在学時代の仕事にと考えていたものが発展して会誌発行に至った訳である。

たしか、具体的な計画に着手したのは、私が四年の三五年秋。大卒四年の秋と言えば、就職も決まり、卒論と卒業試験がちらつと気になる程度で、ともすれば気のゆるむ頃。それだけに、卒業迄に発

行できるかどうか心配ではあった。編集と資金集めを二大事業として夫々ゲームを組んで仕事にあたった。編集委員として名を連ねた四年の私、福光(神鋼)松岡(積水)三年の永田(富士銀)山本(第一銀)二年の久下(敷紡)の外、当時の風韻会現役(九十二回)の総力を結集した。その意味で創刊号は、良きチームワークの所産であったといえる。勿論原稿集めにあった松岡君をはじめ担当者夫々の苦勞は大変であったが、これも先生、諸先輩の暖かい御援助によつてむくわれたことは申す迄もない。

風韻も後輩諸氏の御尽力で号を重ね、今回が第8号にあたる。よろこばしいことではある。(昭三十六年卒)

近藤哲久

私が幹事長に指名された時、先輩から語り伝えられた風韻会の伝統が、普段になく重くのしかかってくるのを禁じ得なかった。

なぜなら、従来、謡の技術向上にのみ重点を置いていた——少なくとも、私にはそう思えた——風韻会が、はたして「能楽の研究」を目的とすると言えるか、という疑問を、当時感じていたからである。大学のサークルとしての存在意義を主張し得るには、その目的に意義がなければならぬ。

だが、標榜する「能楽研究」そのものに、四年という自然的制約の中で、どの程度の成果が期待できるかについては自信がなかった。能楽の歴史的背景に始まって、曲趣・拍子・位そして作り物など能楽の全体系を組み立てる部品を一つ一つ調べる作業を風韻会の活動として始めてこそ、能楽に近づくと理解していた私は、手さぐりにでも能に接することの必要性を痛切に感じた。

かくて、何よりもまず、月一回の観能会の時間を設けて、能に馴染むことになった。

今まで謡本の中で、観念的にしか理解し得なかつた世界が、我々の前に展開したが、能芸術の深さにおどろくばかりであつた。しかし、現実の活動は、好むと好まざるとにかかわらず、学連コンクールを意識したものであり、相変らず発表会の練習に追われていた。当時、学連内部でも順位づけの功罪につき議論されていたがコンクールが続く限り、落着いた研究はできないのではないだろうか。

その意味で、合宿に講義の時間を設けて、日常活動の補習を試みたことは、風韻会の方向を示す点で意味があつたと思う。(昭四十年)

大林治郎

学窓を離れると、勤務地が多少田舎にありますのでなかなか能や謡を観る、聴くという機会に恵まれません。また一人で謡を続けることも根気のいることです。

そこで春と夏の合宿にはなるべく都合をつけて参加するよう心がけています。その合宿参加の喜びは謡のわざをみかくという喜びのほかに、

①卒業する時までは、ド下手であつた後輩も、いつの間にかめき上達し、今では上級生としていばつていけるけど、あいつが新入生のころは……という姑じみたサデイスティックな喜び。

②会社に入ればド下手ですべての人にヘイコラしなければならぬ私も、合宿では先輩ということで、みんなから羨望と尊敬のまなざしでみつめられる(と自分では思つております)喜び。

③趣味を同じくする者だけがもてる共通の話題「幽玄」「ワビ」「サビ」の世界について話せるアカデミックな喜び。

④麻雀で負けることを思えば僅かな費用でたかられたというマゾ的な欲望が満たされる喜び。等。

とあるわけですが、ホンマのことを申しまして、学生時代に返つて、他愛のないことを寝モノガタリに話せることは(小生もうしばらく独身を続けます故)無常の喜びでありましょう。

とは申せ、私も十四回生もなかなか全員打揃つて合宿参加ということもできませんが、なるべく多くの先輩の諸氏が、参加されるようお願い申し上げます。(昭四十一年卒)

五十嵐勝三

私が幹事長であつたいつか、私は風韻会運営行き詰りと自分の目的の不一致から退部届を出したことがあるが、宇治先生にいまめられて、再度風韻生活に戻つた。今から思えば、退部せずによかつたと思つている。そのためか、実社会での人と人との和、協調性についてはなんとか解決して行く自信がある。又、風韻生活で得たことは理論だけではだめであり、身をもって体験し、肌で感じてはじめて自分のものにできるんだというところであり、今後大いにプラスになるだろう。

次に思い出すことは、歓送会のことである。私は自分の四年間をふりかえり、ひたすら風韻を愛し、謡ひ、舞うことに情熱をそそぎえたことに満足感をおぼえ、又後輩諸氏も感激してくれた姿が今でも「蛍の光」を聞くたびに思い出される。

今でも、一途に情熱をそそぎえた四年間をかえりみても悔いは全くおこらない。卒業後も毎朝、清経、巴、蟬丸、玉の段など思い出の曲を謡つてから出勤しています。後輩諸氏も四年間位は、サークル活動を是非ともやつて下さい。

最後に、私を育ててくれた風韻会の発展と、御指導下さつた宇治先生、藤井先生の御健康を祈つて、筆をおきます。(昭四十一年卒)

三十五周年記念

第三回秋季発表会

第三回秋季発表会は、菊の香芳しい十一月十八日(土)に盛会の儀をもつて終了されました。

当日、会場は昨年と同様、本学学生会館ホールで、季節がら少々寒かつた様ですが観客数も昨年を上回り、午前九時半に全員の素謡・菊慈童より始まつて、予定よりもやや早くなりましたが、十八時には無事終曲を迎えました。特に、早朝から藤井先生を始め、荒川、松原、福光諸先生方及び秘曲「東国下り」を、でお聞かせ下さつた粟岡先輩、それに井口先輩等、我々の舞台に一段と豪華、華麗な花をそえていただきました。

秋季発表会は、この一年間の神大風韻会の活動の総括でもあり、また学校内外の人々に我々の活動を問う唯一の機会でもあります。それで、出来る限り部員全員が、謡・仕舞あるいは舞躰子を発表できるように考慮致しましたので、素謡九番、仕舞三八番、舞躰子五番という結果になりました。

次に番組の中から主なものを付記いたします。

連吟	田村	大阪市立大学謡曲部
舞躰子	船井慶	芥川美和子
忠度	上野圭輔	
小袖曾我	内海隆彦	
	吉田孝平	
	岩崎勝至	
三笑	安藤幸雄	
	藤本吉郎	
春栄	福山和子	
井筒	荒川祐吉	
	藤井茂	
船井慶	松原貞吉	
	先輩有志	
俊寛	凌霜謡会有志	
葵上	先輩有志	
仕舞	玉ノ段	宇治正夫

以上でしたが、最後に、今回の会の成功を喜びますと共に、御支援下さつた皆様から御礼申し上げます。(A・C)

神戸大学風韻会創立三十五周年記念を兼ねた第三回秋季発表会も盛会裡に終わることができました。これもひとえに、宇治師範、藤井先生はじめ、諸先生、諸先輩の御支援のお蔭と、部員一心より感謝致しております。

当日、お忙しい時間をさいて、わざわざ私達の発表会に御出席下さり、又多年御指導頂きました宇治師範への記念品贈呈に御協力下さいました各位に厚く御礼申し上げます。

なお、今後ともよろしく御指導、御鞭撻下さいますようお願い申し上げます。

風韻会幹事長

向浜 幸雄

先輩便り

ここに書かれている先輩方は卒業されてからも長い間謡を続けておられます。
やりだしてからまだ日の浅い私は、何十年も謡を続けたら精神的、肉体的にどのようなか見当が付きません。今はただ、声がかうまくできるように、上手に皆と一緒に謡えるようにだけ考えて、練習しています。
願わくば、私も謡を続けて、何十年か先に、謡が自分の人生観、また謡に対する心をどのように変えたかふりかえってみてほしいものです。
(K・Y)

井口宗敏

神戸在学中私は当時の学内謡曲部ともいうべき鞍馬会には全然関係がなかった。というのは私は当時全然謡曲を嗜んでいなかったからである。私が謡曲を始めたのは大正十年で神戸から東京商科大学へ転学した直後である。その時の先生は矢張り神戸同期、共に東京に転学した若林利造君である。若林君は京都五中の出身で、故井上嘉輔師がその同窓である関係から、夙に同師につき謡曲を学び神戸在学当時、鞍馬会の重鎮であった様である。この意味に於て私の謡曲は発生的に鞍馬会に関係があるともいえる。若林君は現在神奈川県扶桑自動車社の社長をしている様であるが、もし関西に住んでいるなら凌霜謡曲会にも又、風韻会の大会にも招じて今も尚おとろえぬ美

伊藤欣二

風韻会における私にとつての最大の事件は、最近の事ながら、五月十四日の「道成寺」のお披露である。道成寺は私には十五年余来の懸案であった。

まだ戦後の世情の安定しない昭和二十六年の一月頃ではなかったろうか。姫路市の妙行寺で素謡の会があり、その時初めて「道成寺」を聞いた。うる覚えで、シテ井上參次良師、ワキ江崎真実師であったように思う。

当時は無論巧拙を判ずる能力はない。しかし、一曲の底を流れる漲り溢れ血を吹き如き厳しい力、幽玄微妙な間、そして、たとえやうのない妖しい美しさ——謡をやるからには何としても一度はやらねば、と心中秘かに期したものである。その一年余り後に家元の能「道成寺」を見て更に決意を深くした。そして漸く風韻会五十周年を期し、凡そ一年程前から稽古を始めたのであるが、処がこの時に

は稽古の調い方がいかに性根の掘ってないものであったかを腹の底から思いしらされた。せめてもう半年みっちり稽古させてもらったら、多少ましなものが出来たのと思う。

風韻会を機因としての恩師佐野一彦先生との十幾年振りの御出合い、また二十五年目に初めて宇治先生から西洋音楽の本質的なものに関するお話を伺って我が意を得たことなど、私にとつて語りたいた事は尽きない。ともかくも「道成寺」は能芸術の最も象徴的な曲であり、凡ゆる芸術に比肩して聳え立つ永遠の曲である。今生の思い出に、何とか宇治先生の能「道成寺」を拜見したいものと切に思ふ。
(昭十七年卒)

林哲夫

私の履歴書

学歴 昭和三十三年卒

職歴 同年四月日本毛織(株)入社

本社経理部財務課勤務四年

同 製造部業務課勤務六年余(現)

謡歴

風韻会所属 一年四ヶ月

日謡会(日本毛織本社謡曲部)所属十年(?) 現在に至る。

右の略歴の如く私が風韻会に入会した、即ち謡なるものに初めて接したのは三年生の秋(十一月)である。従つて学生時代は正味一年位しか練習しなかつたわけだが、それがなかつたら会社の謡曲部へも入らなかつたらうと思うと若干運命的な感じがしないでもない。やり初めは声がかすかすれてしまつて全く謡にならず、多少共声

が出るようになったのは四年生の夏三・四年有志が高野山で一週間程合宿練習してからである。当時の幹事長上野君(現日商)等の親切な指導で午前午後の二回練習、竹生島・経正等をやつた。この間奥の院を見物したり、夜は麻雀教室が開かれたり楽しい日々を過ごした。(当時私は麻雀が全く出来ず、夜の部に参加が出来なかつたのは今思い出しても残念な事である。)

入社後はしばらく工場実習があつたが、この間は専ら算盤の練習に精を出し(三級になりました)七月に本社配属後日謡会に入った。指導は観世流潮照寿先生、当時は年配の口やかましい課長連中が多く、練習会の後などいろいろ有難いご高説を拜聴出来たが、此頃は殆んどが停年等で他社へ転出され、我々が先輩格になつてしまつたのは淋しいことである。

お蔭で昭和三十五年から今年の春まで六年間謡曲部の班長を仰せつかり、至つたない世話役を相勤めた。日謡会の現況は有料会員が男子七名女子十名程度、他に名誉会員若干あり、素謡だけでなく仕舞もやります。感心に女子は上手な子がやめても後継ぎが育ち割合部員の数も多い。そこへ行くと男子は新規に勧誘しても二三ヶ月で棒に振る者が多く、長続きするのは何等かの形で入社前からやつていた者が多い。それにしても謡曲部の運営・維持はなかなか難しく、コーラス部の様に派手な活躍は難しい。風韻会が近年益々発展しておられるのを聞くにつけ、宇治先生の熱心な指導と、藤井先生初め諸先生のバックアップ、現役諸兄のご活躍には頭が下がる思いがする。

幸い私の場合、勤務先に謡曲部があり、先生の指導を受けると言つた恵まれた環境で今日まで細々ながら謡を続けることが出来たが、これからも謡を続けることが何等かの意味で人生にプラスとなるように努力したいと思つております。
(昭三十二年卒)

私の提言

サークル活動への姿勢

高尾 浩子

「思い出多い風韻会生活」「得ることの多かつた四年間」。先輩達は挙ってサークル活動の良さを、長くて短かつた学生生活を振り返りながら言われます。後輩達はその言葉を聞きながら、自分が同じ道をたどっていることに仄な自信と満足を抱きます。確かにその通りです。知人は得ても友人は容易に得られない大学生活にあつて、四年間共に歩める仲間をもち、無意味に過ぎてしまひそうな余暇を活動で埋め、古典芸術と言われる能楽に親しむことは、真実意義のあることだと思ひます。それはいつの間にか私達に学生時代の「何か」を残してくれます。この「何か」は風韻会という名のもとに全て、結ばれているため、印象は強く、随分と重みを感じさせます。「決して悪くない」重みを、です。でも私達現役はこの重みを頼つてはいけません。何故なら、それは、今、活動せねばならない私達にとつて余りにも甘すぎるものだからです。はつきりした目的意識を持ち、自己の青春の流れをぶつけるつもりで、より主体的に活動する。これが私達の姿でなければなりません。現在を厳しく見つめ、その中で絶えず成長してゆこうとする若人でなければなりません。

源 源 源 源 源

レポーター

シテ一人主義

内海 隆彦

能はよくシテ一人主義であり、演劇ではないといわれる。これはどういうことであろうか。それを歴史的に、又演能の立場から考えてみよう。

作能の歴史をたどってみると、観阿弥の作品にはシテ一人主義というものは、まだあまり現れていない。彼の作品といわれる「自然居士」「百萬」（後世阿弥改作）を考えると、一つのストーリーがあり、その中に必然的に筋の上から無理なく舞がはいって、その舞を幽玄（この幽玄はあくまで観阿弥のものであり、世阿弥のものとは性格がちがう）の山にしている。ストーリーがあるからにはワキも重要な登上人物で、シテと同時代の人であり、劇的要素もかなり強い。

世阿弥の作品になると、能の形式は大きく変化し、中心はもちろん舞である。その舞に至る過程が観阿弥のものとは大いに違ってくる。「井筒」を考えてみてわかるように、初め里女が出てき、業平と紀有常の娘の話聞かせ、最後に自分が有常の娘の幽霊である

情性に身を任す者であつてはならないのです。

風韻会も今年で結成三十五周年を迎えました。男子部員だけのサークルから女子部員の加入、増加。そして来年には教育学部移転に伴ない全学部が六甲に集まります。このように総合化されつつある現時点において、風韻会は一つの転機を迎えていると言つても決して過言ではないでしょう。また、能楽研究のサークルを旨としながらも、謡曲・仕舞の練習にのみ終始せねばならない現状を考えれば能楽研究を幅広く組み込んだサークル活動への成長を思はずにはいられません。このことは近藤先輩も「方向」の中で述べられているように、何年も前から懸念されてきた問題なのです。

活動年数や入部動機にいろいろと違いがあるため、学年あるいは個人によつて、サークルに対する意識の異なることは、やむをえません。しかし私達は今、その困難を乗り越えて、サークルというものについて考えねばなりません。不満を問題意識にまで高め、全部員がサークルについて論じ合う姿勢を持たねばならないのです。そして、目的意識をはつきりと握み、今後のサークルの方向を描き出さねばならないのです。そうしてこそ、私達の要求にかなつたサークル活動がなされ、より意義のあるサークル生活がつつちかわれていくのではないのでしょうか。——ある日、ふと感じる「重み」が、こうした結果であつて欲しいと思ひます。

ことを述べ中入となる。中入後はワキの僧の夢中に有常の娘が出てき、業平との物語を示し、舞を舞うのである。この様に世阿弥の能では、舞が中心で、物語が舞のためにあり、舞を舞うシテだけが本当に演者といえ、シテつまり為手である。ワキは全くワキ役で、時代的に見ても、シテとは違った時代、シテが過去の人間であるのに対し、ワキはその時代の人間である。つまり、ワキは見物人の代表にすぎないのである。

世阿弥の後の時代の作能を観世小次郎信光の作風からさぐってみよう。信光の作として伝えられるものには、色々あるが「安宅」（世阿弥の作品を改作したとも考えられるが、現行曲は信光の作と考えてよい）——「能楽源流考」能勢朝次「船弁慶」を見てもわかるように劇的要素の強いものであり、ワキもシテと同時代の人物で、同等に重要な役割を荷っている。「船弁慶」においてなど、むしろシテよりワキの方が重要であるともいえる。ではどうしてこのような変化をとげたのであろうか。

歴史的に見て、観阿弥の時代はまだ十分に南北朝の内乱がおさまつておらず、その演能の対象は一般庶民である（庶民といっても、階級的に見ると、名主など地主階級が主であった）。世阿弥の時代のように、武士（主に上層武士）につてを求めようとしても、武士自身が不安定であり、不可能であつた。彼がやつと、義満にみとめられた（今熊野勸進猿楽）のは死の十年前である。それだけに一般庶民の好むストーリーもおもしろく、また山として舞のある能が形成された。世阿弥の時代になると、最初から義満の同朋衆（江戸時代の茶坊主的なもの、身分的には大体河原者になる。文化面ではこの

時代の代表的なものが多い。)として出発するのであり、能自体「貴人本位」なものとなる。どちらかといえば、義満一人を対象としているといっても過言ではない。つまり、この時代貴族は社寺荘園をのぞいて、ほとんど彼らの経済的基礎である荘園が崩れてゆき、昔の栄華を夢見ただろうし、三番目物などそうしたことにはびつたり来るものがあった。上層武士にしても、彼らの出身が貴族に比べ劣っていることはわかっており、貴族に追従する形で文化的にも貴族化し、義満はその代表的人物である。それだけに世阿弥の能も貴族的な幽玄を中心としたものとなった。小次郎信光の時代になると、世阿弥のように一人の人物との特殊な関係はなくなり、能は一般的に武士の式楽となる。この時代は下剋上の盛んな時で、中・下流の武士が支持層の中心となる。又、この時代は、応仁の乱など、世が乱れ、武士や本所としている社寺だけにたよっておれなくなった。そこで一般庶民も対象とし、そのために用いられた方法が勸進猿楽(本所とする社寺の修復を目的とし、入場料をとり、利益のうち一定の割合を名を借りた社寺にわたし残り、猿楽座の利益となる)のである。これは本所である社寺も満足し、猿楽座にとってもある程度自由な演能が行ない得たので、よく用いられた。大体対象は一般庶民といえ、そのうちでも、土倉・酒屋など商人層や名主など金のある上層農民等であった。このことは勸進猿楽の棧敷の値段段がかなり高いものであったことでもうかがえる。(中世のこの時代、時代的制約とも考えられ、下層民まではまだ文化が浸透していたとはいえない。それは勸進猿楽においてもいえ、棧敷の名にも、殿原、女房等とやらんで、地下の席があるが、まだ副次的な役割をはたし

ていたにすぎない)一般庶民を対象とすることになると、どうしても世阿弥の幽玄を求める能では観客はついて行けない。そこである程度ストーリー性をもちさせた、世阿弥の夢幻能に対し、演劇的要素の強い、現在能が多くもてはやされ、作能においても、その傾向が強かった。又演能時間から考えても、一日に十七・八番行なわれた記録があり、現在のものよりかなりスピーディなものであったと考えられる。

歴史的には、上記のようにいえるが、演能の上から見るとどうなるだろうか。

今年(昭和四十二年)八月に発行された、学内誌「風韻会」第四号において、安藤幸雄君は、能は東洋的対話の世界であるといっている。この場合の能はここでいう世阿弥の夢幻能であろう。一般に演劇が行なわれる場合、登場人物同士の対話がある。又、登場人物と見物人の対話がある。西洋の演劇一般において、この二つの対話が分離されている。(そのことを最もよく現わしているのが舞台と客席を分離する幕の存在であろう)それに対し、能とくに夢幻能において、ワキは見物人の代表であり、二つの対話は融合しているのである。つまり、シテとワキの対話が即、シテと見物人の対話となるのである。シテすなわち為手であり、この対話は登場人物と見物人の対話となる。(舞台の構造上からみても、舞台が見所にはいりこんでいること、幕のないこと、鏡板の絵が日本どこにでもある老松であり、簡単な作り物によってのみ舞台に変化を与えるだけであることからもうかがえる)この二つの対話が融合しているというのは、世界中どこをさがしてもないかもしれない。能独自のものでは

らう。(この意味で日本の対話ともいえるのだが安藤君が東洋的対話という言葉を使っており、又東洋の演劇についての知識が不足するので東洋的という言葉を使っておく。又以下の説明からもわかるように、はく自身もやはり、東洋的なものと考える)どうして、二つの対話が融合したかを考えてみると、日本がアジアモンスーン地帯に属し、農業形態から考えても、水稻農業で、西洋のように牧畜的小麦農業でないことが大きく影響している。(能とは全く関係ないが、「風土」和辻哲郎、「肉食の思想」鮎田豊之等を参照されたい。家畜の存在による、ある一線で切るといって考え方のあるなしが大きい)つまり、この場合、日本の気候風土からくる農業形態の相違に負うところが大きい。

世阿弥の夢幻能の形態に合ったものとして、シテ・ワキ・ツレなどがきめられたが、信光等その後のストーリー性のある能にどのような制約を与えたかという点、最もその制約を受けているのは子方の用い方である。「船弁慶」においてよく現われているように、義経を子方している。本来成人した人物で、静とも夫婦関係にあるのだから、ツレとかワキツレにすべきところを、シテツレにはできず、又、ワキツレも他にあり、しかたなく子方にしたと考えられる。つまり、能の見所の変化による形態の変化に、シテ一人主義による役の固定的形態がついてゆけず、そこに矛盾を生じ苦肉の策として成人した人物をあえて、子方としたのである。

この固定化の弊害は家元制度の成立と共に、社会的制度にも、大きく影響し、そこに今日も残る多くの矛盾を生み出し、劇的要素は歌舞伎として、派生的文化(そこにも制度的固定化は影響をおよぼしている)としかかなりえなかった。

古書専門
誠実売買

小牧書店

神戸市東灘区上東688
阪神御影駅浜側
TEL (85) 3286

本とレコードと
コーヒーの店

宝盛館本店

阪神御影駅南
TEL (84) 1145代



Elise

〈団体予約うけたまわります〉

神戸・阪急山側〈三映前〉TEL (33) 1255

思いつくまま

—能芸論の爲のメモ—

上野圭輔

「能」日本演劇の一種目。役者の演技を伴う声楽と、合唱者の声楽と、器楽伴奏とによる総合舞台芸術。奈良朝時代の散楽という外来の雑芸が、我古来の民族芸能と結合し、歌舞的要素を強化し、劇的要素を加え、(猿楽の能)となり、田楽能の影響を受け、室町時代に大成した仮面楽劇。(岩波小辞典「音楽」山根銀二編より)」

能、即ち(申楽の能)が、散楽や神楽、平曲等々を螺旋的かつ選択的に包摂し乍ら申楽から発展したということについては、諸家の説も、概ね一致しているところである。それでは芸術史の中で、世阿弥に代表される、所謂「能の大成」は如何なる意義を有するのであろうか。私はそれを、土俗的乃至民俗的な雑芸を、舞台芸術という自覚的な芸術活動として取組んだ点に求める。ここに芸術活動とは、一定の美観に基づく、自己対象化の体系的な人間努力、即ち創造活動である。それは状況乃至現実に対する真摯な対決に始まる。

このように芸術活動を規定するとき、能がこの規定に該当するかという疑問が提起されるであろう。しかし乍ら、岡本太郎氏の言うように、「すべての古典はそれぞれの時代に、あらゆる抵抗に対して現在を決意し、たくましい生命力を充実させた精神の成果」(岡本太郎著「日本の伝統」P.32)であり、能にしても、当時きわめて斬新で積極的な哲学であった禅思想にのっとり、「乞食の所行也」

都風、貴族風にして金閣寺の如き寝殿造りを取り入れた建築を行なっているのがその好例である。ここに至り、能はその大衆的通俗性を希薄化し、貴族文化を継受した上級武士ら支配階級の意にそうよに洗練されていくのである。

このことは世阿弥の「風姿花伝」の中で、「いかなる上手なりとも、衆人愛敬欠けたる所あらんを寿福増長の為手とは申し難し。(岩波版「風姿花伝」P.76)」と述べながらも、「上方の御目に見ゆべからず(前掲書P.24)」とか、「申楽は、貴人の御出を本とすれば、……(同P.40)」とむしろ上流階級への配慮を強調していることから知る事ができる。

さて、安定期にはいった武家階級が貴族文化の摂取に努めたことは前述したが、この時摂取された文化は、既に往年の活気あふれる王朝文化ではなく、没落してゆく貴族がわずかに現実逃避的に維持を図っていた末期的貴族文化であった。このことは、世阿弥にも影響を与え、ひいては能という芸術の成長力を弱める結果をもたらした。

能における貴族文化の摂取は、今日、能の中心命題と考えられている幽玄なる概念の導入によって代表される。幽玄なる語は元来漢語であり、仏典等に見られたものであるが、美の理念として幽玄なる概念が確立したのは、定家等による新古今集においてである。しかしながら、それは清新な歌の素材を提供する生活基盤をくつがえされた公家達が、現実逃避の場として構想した幻想世界であり、極めて消極的な美理念であった。かかる歴史的背景を持つ用語によって自己の美理念を表現し芸術的創造力を失った貴族を模倣しなげ

とさげすまれた下賤な民衆娯楽であった申楽に真正面から芸術として取組んだ芸術革命であり、彼等はいわば、「古い伝統をたくましくのりこえたモダンアートの創始者」(前掲書P.35)だった。

この一連の芸術活動は、当時の世相に負うところが大きい。即ち、二条河原落書に「此比都ニハヤル物」として「俄大名、迷者」「下剋上スル成出者」といっている支配階級の交替の歴史的状况の中に於て、一種の文化革命、家永教授のいう「文化の下剋上」現象として営まれたのである。貴族文化に変わり、武家階級の文化として従来の土俗文化が台頭したゆえんである。

しかし、このことは同時に、新興の文化が一般庶民からはなれ武家階級に寄生せざるを得なかったことを意味する。能においてもそれは例外でない。今熊野の猿楽能において、足利義満が観阿弥の芸を認め、また当時藤若といった世阿弥に対する義満の稚児趣味の興味がなかったら、能が文化の第二線に浮上することはなかったであろう。かかる武家社会への寄生という状況の中で、世阿弥は一方では申楽を「乞食の所行」と嘲ける貴族文化崇拜者と対決し、他方では、武家階級の安定に伴い、その事大主義的傾向を強めていった。つまり、武家社会成立当初においては、武家は反芸術的非文化的であり、和歌・雅楽といった当時最高の知的水準にあった公家の文化より、民間でもはやされた種々の雑芸に興味を持ち、それらを育成したが、安定期に入ると、むしろ王朝風、公家風の文化に憧憬を感じるようになった。貴族文化の摂取は鎌倉幕府においても意識的政策的に行なわれていたが、義満に代表される所謂北山文化の時代になるとその傾向はますます強まっていく。即ち義満が生活自体を

れば芸術としての存在を主張しえなかった点に新興芸術としての能の苦惱が存したといえるであろう。勿論、世阿弥が幽玄なる概念を導入することの意義を全く否定してしまうことはできない。それは能の大成という過程ですこぶる積極的な意義を持つ、即ちかかる概念の導入は、いわゆる芸能の分野において初めて美の認識が、感性的認識から思弁的認識に高められ、抽象的普遍的な概念としての美の存在が意識されたことを意味するからである。かかる認識が存在してこそ、芸術活動は統一的に営めるのである。とは言え「花鏡」に「公家の御たすまひの位高く、人世にかわる御有様これ幽玄なる位云々」とあるのは、世阿弥が上流武家階級の持つ「王朝風なるものへのノスタルジア」という情緒的雰囲気を受けて、幽玄ひいては能それ自体を懐古的、保守的なものへと駆り立てていったことを如実に示すものである。世阿弥の貴族文化への傾斜は、古今伝授の風を真似て、能に秘伝を持ちこんだことで頂点に達する。ここにおいて、能の大衆性は全く放棄されたのである。晩年の世阿弥の幽玄観はその境遇や上流社会において禅思想がニヒリスティックなものに至小化される風潮等から若干異ってきているが、その保守的な性格は変わっていない。

つまり、大衆的な新興芸術として、芸術家の強靱な自己主張であった能も、その寄生的性格の故に、貴族的な、保守的なものに変質を余儀なくされたのであった。世阿弥の能とは、このような内部的矛盾をはらみながら大成されたものであった。そして、かかる矛盾は後世の幾多の芸術にもかかわらず遂に克服されえず、能をしてよりやく形式とし、観念化する結果を招来したのである。具体的には

応仁の乱後の混乱期にパトロンを失った能は、大衆的基盤を再び取り戻すべく、例えば、小次郎信光の「安宅」や「船弁慶」に見られるように、ドラマチックな手法をとり入れた。又、桃山期には、豪放な時代の雰囲気を受けて装束を華美にしたり、林屋辰三郎教授の研究にある如く四番目物の演能をふやす等の操作が行なわれた。(林屋辰三郎著「歌舞伎以前」第九章)

しかし、これらの努力によっても、一度失われた大衆的基盤を復帰せしむるに至らず、創造力の枯渇を防ぎえなかった。江戸期にはいると、幕府が、京都朝廷と対抗するために、官廷の式楽たる雅楽に相当する幕府の式楽として能がとりあげられるようになった。ここに能は武家の単なる文化的アクセサリーとしての地位に甘んじるようになり、わずかに能楽師の芸道意識、職業意識の中に芸術の残照を残すのみとなったのである。

要するに、世阿弥が「衆人愛敬」を本旨とし、強烈な土俗的美意識の下に成立した本来的に大衆芸術たる能において、その美理念が貴族的かつ頹廢的な「幽玄」なる概念に統一したことに彼の誤算があったといえよう。芸術の自立し難い社会状況において、寄生的性格を持つことは必然であったとはいえ、彼は貴族文化への傾斜を、その芸術的動機に転化させ、大衆遊離の傾向を強めたのみならず、幽玄という用語とともに、あいまいかつ情緒的な世界を舞台上に持ちこんでしまった。ここに彼は自己の芸術性を否定する要因を自ら醸成していったのである。

「初心忘るべからず」世阿弥の原である。この言葉は初期の庶民的なハツラツとした息吹きを没却していった世阿弥自身に向けられる。深玄に触れたものと思われる。

しかるに、そういう幽遠や深玄の美的体験は、平安時代の文化社会においては、都市的洗練と貴族的教養から蓄積されたものであったから、美としては、やさしいとか優とか雅とか艶とかとよばれる情趣から傾いてきたものであることはいうまでもない。けれども、このような美的体験が平安末期から鎌倉初期に、過去の美として追慕され、「あわれ」として回顧されるにすぎなくなつた。しかもその「あわれ」は、平安末期までの詠嘆のそれではなく失われたものに對する哀情にならざるを得なかつた。しかし、そこにはまた、余情幽玄の浸透する分野が開けていて、その「あわれ」を知ることを「有心」という語でいあらわされたのである。

そういう幽玄は、歌論・連歌論には伝象されていたが、鎌倉幕府の開かれた一一九二年を境に、これまでの京都の公卿的な生活や文化を排し、保元・平治の乱以後年とともに興隆を続けてきた地方的な生活と武士の文化を、京都を遠く離れた鎌倉にはつきり打ち立てようとした。

「幽玄」という語は、和歌・連歌に限らず時代の美意識を表わす語として広く用いられるに至つたが、それとともに幽玄美は、京都の公卿的優雅を意味する語として、その美意識が限定され、新しく起つて来た地方的武士的なものの価値意識は別なものとして現われしてきた。

「徒然草」の百二十二段に、
「詩歌に巧みに、糸竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世にはこれをもちて世を治むる事、漸くおろ

るべきであつたかもしれない。

幽玄について

中西治嘉

能において幽玄といえは、まず世阿弥のことがおもしろい。世阿弥の大成した幽玄が日本芸術の最高理念であり、幽玄を考えるにあたって、世阿弥は切り離せないのである。そういう世阿弥の幽玄はいかなる幽玄であつたのか。いうまでもなく、平安末期から鎌倉時代にかけて広く行われた歌論の伝統を受けながら、それを広く豊かなものに展開すると同時に、深く真実なものに徹することによって日本美学の根源を開いたことは、日本文化史の上にめざましい事績であつたとしなくてはならない。

「幽玄」の語は、もと中国の哲学および宗教における概念として用いられ、我が国に移入されてから後も、現象の奥にある実在とか認識の底に潜む深玄なものを意味する語として用いられていたが、この語をはつきり芸術的な意義として用いるに至つたのは俊成・定家・長明以下の歌人・連歌人などである。

そして、それは、はじめに「余情幽玄」と呼ばれたように、余情すなわちことばに表現されたものの上に漂う気分的な情趣であつて表現に即して成立する暗示的な気分象徴ともいえるであろう。その暗示的な情趣や気分象徴は、人によってさまざまな特色を示しているが、それが非限定的なものを暗示しているところに幽玄を感じ、

かなるに似たり。金(こがね)はすぐれたれども、鉄(くろがね)の益多きに及ばざるがごとし。」
とあって、幽玄は貴族社会では重んじているけれども、当代にあつては実用性の大きい鉄すなわち武道のような強力な文化に及ばないと批判されている。

このような鎌倉時代における幽玄の美的価値の社会的変化が、観阿弥・世阿弥の幽玄にいかにか継承されているかは、なかなか複雑であるけれど、世阿弥の幽玄美は、彼が生涯の稽古と習道を傾けて発掘した価値であり、その稽古と習道には一貫した対象の純化が究められていくといえるのである。

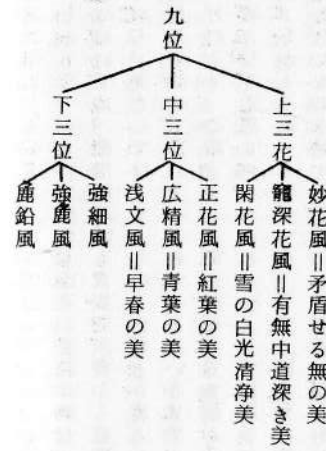
世阿弥の幽玄論は、整然たる体系をもつて構築されており、それは変化の豊かさと統一の深さ確かさを極めた体系であつて、世阿弥の能楽論のすべてを幽玄の一語で説くことは、この変化の豊かさと統一の深さを見落しやすいのであるが、あえて幽玄のみを研究するものも意義と思われ。

世阿弥の幽玄美に関する論述はいろいろあるが、美術全体として論述している「九位」について、考察してみよう。

「九位」は、彼の能楽論の重要なものが次々と書かれた五十八歳の「一至花道一、五十九歳の「人形」(「二曲三体絵図」)、六十二歳の「花鏡」およびこのころの成立と思われる「遊樂習道風見」などについて書かれた伝書である。この「九位」は「九位注」と「九位習道の次第条々」の二部から成つている。なお、「九位」は、世阿弥の能における芸風を次序し、それぞれの美的価値を品等してい

ることは明らかであるが、その美的価値が幽玄美であるということ
は、うたがいのないことである。

「九位習道の次第条々」の中に、中初・上中・下後と言は、芸能
の初門に入りて、二曲の稽古の条々を成るは、浅文風なり。これを
能々習道して、既に文をなして、次第連続に道に至る位は、はや広
精風也。爰にて事を尽して、広大に、道を経て、既に全果に至るは
正花風なり。是は、二曲より三体に至る位他。とあることによつて
も明らかのように、習道の基礎が二曲であり、二曲の発展が三体で
あり、さらに広精風で「事を尽して」とあるのは、「至花道の二曲
三体の事」の中に「最初ノ児姿ノ幽風者三体ニ残り、三体ノ用風者
万曲ノ生景ト成ヲ知ベシ。」とあるように、二曲から三体へ、三曲
から万曲の生景への展開を示したもので、その芸風の基礎が幽玄風
であることを示している。以下、「九位」に基付いて、幽玄を研究
してゆこう。



らかである。この広精風が「是より前後分別の岐界なり」と言い、
「九位次第」には、この広精風を「芸能の地体」とし、あらゆる芸
能の美を展開させる基礎としている。

第三に展開されるのは正花風で、「露明かに、日落て、万山紅な
り」と神韻をひき、「青天白日の一点、万山早白遠見は、正花風な
り」と言つて、正花風の正花風たる点を「万山紅なり」という紅葉
の美で象徴している。

世阿弥はこの秋の紅葉の美をもって広精風の満目青山の美的発展
としているのであって、ここにも自然の運行が現出する美の発展を
的確にとらえていることがうなづける。そうしてこれを、「得花に
至る初入面也」と言つて、「花」に美の展開を的確に跡づけている
のである。

世阿弥が「得花」と言っているのは、中三位までは「位」である
のに、上三花になると閑花風などのように、その一つ一つに「花」
を用いている。

四

「九位次第」に「是は、今までの芸位を直下に見おろして、安得
の上座に座段する位、閑花風なり」と言つて、第二、上中として、
この上三花は自然美の推移をもつて示してきた中三位の美を直下に
見おろして、もう一段飛躍的に発展したのが閑花風であるとしてい
る。

さて、閑花風は「銀境裏に雪を積む」と言う神の公安を引き、
「白光清浄なる現色、誠に柔和なる見姿、閑花風と言べき歟」とい
うように指摘している。これが冬の自然美である点においては、中

九位とは上図のごとくである。しかも、その「九位次第」を述べ
るに当つては、中初・上中・下後という語を用い、能芸の修道にお
いては中三位を最初に、上三花を中に、下三位を最後にという順序
をとつて稽古をし、美の展開を期さなくてはならないとしている。
ではその順序通りに、西尾実氏の「世阿弥の幽玄の美的体系」とい
う論文を座右において、じっくりと論ずることにしよう。

三

稽古の最初は中三位の出発点である浅文風に見出されている。浅
文風とは、いかなる芸風の立場であろうか。まず「道の道たる、常
の道にあらず」という老子の語をひき、「常の道を踏んで、道の道
たるを知るべし」と問題点を明示した上で、「これ、浅きより文を
顯す義也。然者、浅文風をもって、九位習道の初門と為す」といっ
て、浅文風と呼んだ謂れと、それが習道の初門であることを解説し
ている。この問題点の指摘と解説を導いているものは、明らかに早
春の美であり、それが能楽の出発点であることを示そうとしている。

次に展開される中三位の第二位は広精風と呼ばれているものである。
その広精風は、「語り尽す、三雲海月の心」という神の公案を
かり、「満目青山の広景を語り尽す所」と、その美の問題点を明示
し、これが「広精風の習道に尤これあり」と指摘している。これに
よつて看取されることは、浅文風の展開として見出されている広精
風は、夏の天地に展開されきつた青葉の光景である。春の若葉から
夏の青葉に至る自然美の展開である。季節的には青葉によつて代表
されているが、「山雲海月の心」と言っているところには、その季
節の天地の広景をもつて能芸美の展開を示そうとしていることは明

三位の春・夏・秋に連続しているが、その美が白光清浄たる雪によ
つて象徴され、さらに「柔和なる見姿」としているところに、雪の
白光清浄美をありありと象徴化した芸風がはつきり取り上げられ
ている。

上中の第二段、破といふべき龍深花風は、例のごとく「雪千山を
蓋ひて、孤峰如何か白からざる」という神問の句を引用し、さらに
ある人が、「富士山高うして雪消せず」と言つたところが、唐人が難
じて「富士山深して」と言つたという話をかりて「至りて高きは深
き也。高は限りあり。深は測るべからず」となし、「然は、千山の
雪、一峰白からざる深景、龍深花風に當る歟」と解説している。

ばくは昨年の夏、大学の登山会に参加して、北アルプスを歩いた
のであるが、その時に見た槍ヶ岳などの雪深の美しさは一生忘れら
れないものとなっている。これは登山したものしかわからないもので
であり、「白からざる深景」に接した感じがするのである。

この龍深花風は「九位次第」においては「有無中道」と呼ばれて
いる。雪をもって象徴されている閑花風が「無位の位」と呼ばれる
妙花風に飛躍するために、その有無中道の龍深花風が媒介しなくて
はならず、この有無中道は有の美から無の美への展開を具体的に媒
介すると共に、無の美そのものの発展を基礎づけているのである。

無の美として上三花の最高位に置かれているのは妙花風である。
これは、夢窓の「夢中間答の「新羅、夜半、日頭明なり」を引き、
さらに、「妙と言は、言語同断、心行所滅なり」と断している。新
羅は、中国からいって朝鮮半島の最南端に位する關係上、東方の意
に用いられる。従つてこの句は、東方を望めば夜半に太陽が望まれ

るといふ意である。夜半の太陽など見えるはずがあるか。見えるはずがない。しかし、見えるはずのない太陽が明らかだというのは矛盾も矛盾、絶対の矛盾である。そういう絶対の矛盾が実現しているのが「妙」そのものであるといふのである。従つてそれは、言語で言うこともできないし、思考で達することもできない。そういう境地だといふのである。それは当道すなわち能芸における堪能者の幽玄な見風の極致で、とても褒美の言葉など及ばない。まことに幽玄の本質といふべきものである。

五(まとめ)

歌舞二曲の稽古から出発する浅文風からさらに広精風をへて正花風に至る稽古は、二曲から三体に至る発展で、そこに展開される美は自然における春花秋の自然美をもつて象徴される。ここに中三位から上三花への発展の方向がある。ところが上三花になると、冬の雪をもつて象徴される点では自然美展開の連続にすぎないようであるが、閑花風から龍深花風を経ての妙花風への展開は、有の美から有無中道を経て無の美に至る飛躍的な美的価値の展開であつて、高次にして醇乎たる象徴美の展開である。

六(補足)

中三位・上三位の美的体系をこのように考えてくると、いったい下三位は何であるか疑問が残る。しかし上三花の妙花風が幽玄美の最高極致であるので、下三位には幽玄の美は存在しないと見てよい。下三位の最上位は強細風であるが、実はこれは、「強き」美なのである。「強き」美とは幽玄に対立した美であり、「花伝第六花修」において詳しく論じられている。下三位にはまだ強鹿風と鹿鉛風が

あるが、これらは「鹿き」ものであり、もはや美など存在しない。ただ、このような下三位の芸風は、演能における大衆性獲得のため不可欠な芸風とされているのみである。

このような下三位が九位という幽玄美の体系に加えられているのは、習道の成果として「芸能の地位」と呼ばれている広精風に達した仕手の位によつて美的統一が行われているからであり、さらにいうと習道において上三花に達した仕手の「闡けたる心位」によつて非幽玄を幽玄化する絶大な統一力によつて、この下三位の芸風がそのまま上果の芸風に生かされるというのである。

世阿弥がこの下三位を非幽玄の動作として位置づけながら、仕手の絶大な美的統一力によつて幽玄の極致としての上果にも至り得るという位置づけを行っていることは、彼が幽玄美体系において自然美・象徴美の他に、「わざ」や「働き」を含んだ機能美とも言うべきこの美を位置づけていることになり、これこそ世阿弥の幽玄美体系の発展であり、大衆性を含む美の完成であるとしなくてはならぬ。

(おわりに)

幽玄を論ずると言うことは、難しさを絶するものであるが、結局は、己れ自身能の仕手となり演能してみただうで、身で体得すべきものだといえる。

走馬燈

安藤幸雄

十人十色、しかも強烈な個性の持主の多かった16回生14人は、今や大学を後に社会に巣立とうとしている。

我々の入学したのは姫路分校のなくなる年で、16回生は全員が鶴甲に結集した。いわば鶴甲風韻会の草分け的存在であり、ジュニア部室を確保し、時には六甲の異端者を排斥して、サークル論だの芸術論に熱中し、六甲台部室にはなかった話し合いのムード作りに専念し、風韻会における鶴甲の地位確保に努力したあの血気盛んなった頃より既に四年の歳月が経過しようとしているのである。この四年間の学生生活における風韻会活動は、我々の青春を大声で謳い続け、苦楽を共に分ち合っただけに貴重な体験といえよう。

一口に四年と言つても色々な事があつた。ジュニア時代にはほとんど毎日、あの魔の階段を登つては練習に行き、四年生じきじきによく絞られたが、スキをぬつては卓球やソフトボールに興じ、納得できぬ不合理には文句もよく言つた。幹事学年になると、クラブ運営のむつかしさを悟り、土曜日の練習後には喫茶店で幹事会を重ねあれこれともめ続けたものである。四年生になつて、最高学年のまた指導者としての重責を身にしみて感じ、ようやく謡曲・仕舞に真剣に取り組んだような気がする。コンクール練習では、謡曲を謡つて楽しいという感じも味わい、何となくその真髄に触れたという感じを味わつた。すべて今では全く懐しい思い出である。

秋 春 韻 風

六甲の庭に桜の咲いた時、喜びいっばい入学式、新入部員の薄得に熱弁ふるつてまわつた僕。

六甲の庭に青葉の茂つた時、みんな楽しい大学祭。「狸々」繁盛。そのすきに串かつをこつそり食べた君。

六甲の庭に蟬の鳴いた時、強化練習夏季合宿。あの先輩の厳しき教え、足の痛さに泣いた僕。

六甲の庭に紅葉の映えた時、天高らかに発表会。努力の成果の舞臺子。あの女の姿に惚れた君。

六甲の庭に木枯吹いた時、心ひとつにコンクール、宇治先生の御指導に力いっばい語つた我等。

手練れば切りなし追憶の糸、別れ惜しめば短し四度の春秋。

嗚呼、風韻会。深きかな、想。忘れ難きかな。(K・Y)

この四年間、良き師を得、良き先輩後輩に恵まれ、得るところが大であったが、特に他人のことを聞くことの大切さをつくづく知らされた。また、かなり曲折はあったが、四年間活動を続け得たという我々の自信もかけがえのないものである。これら風韻会で得た体験や風韻精神を今後の実社会で生かしたいものである。

最後に、四年間御指導を賜わった宇治先生に心から感謝の意を表わすと共に、今後の風韻会の発展を祈りこの文を終わります。

合宿

戸田美代子

一年生からすべての合宿に参加。

最下級生としての、のんびりとした楽しい初めての合宿。

最下級生でもなし、少しわかりかけた頃の合宿。

精神的にも肉体的にも疲れ、体操にいままでになく朝早く飛びだした幹事学年の合宿。

少し隠居の淋しさと閑かさを感じる四年生の合宿。

前日まで参加不可能と思っていたのに、夜急に思いたち、いかずにおれないような気になり、明朝早くでかけるといふこともできる程、荷作りもなれました。それぞれの合宿には、サークルとして、個人としていろいろな思い出があり、とてもとても書けるものではありません。

大世帯になりつつある風韻会において、個人個人の考え方をまとめて運営していくことのむつかしさは、いろんな点にあらわれてお

出となったのであります。

「紅葉狩」に決したのは十一月末。以後約二十日間、四年生十一名全員大いに練習に励んだのであります。今年には出場者が多かった事もあり、なかなか足並みが揃わず、私自身も十分な練習であったとは思っておりませんが、宇治先生の御指導に精一杯、ついて行くとしたのであります。

「紅葉狩」という曲は、実に一年から四年間、仕舞に、連時に、素直にと謡いつづけてきた曲であります。先生の御指導のもと、真に身を入れて謡って行くと、実に難しいものであります。そして我々はここに至って謡曲の醍醐味と言うか、真髓と言うものにふれた様な気がして、幸福でした。これも宇治先生のおかげであり、大変感謝しております。

コンクール当日、我々全員が感じた事は、出番を待つ時間の長かつた事、そして発表時間の実に短かつた事でしよう。何も考えず、全員全力を出し切って謡った後には、何とも言えない満足感と共に脱力感がたまたまのであります。これは全員に言える事だと思えます。四年間共に励まし合い、謡い続けた努力を、この「紅葉狩」の中にひめて力一杯の締めくくりをしたつもりです。

我々は、このコンクールに先だち、宇治先生ともお話ししたのですが、目先のコンクールの事にだけとらわれず、常に目標を高い所に置いて、それに向って進むべきだと思います。あくまでコンクールは手段であって、目的ではない事を十分認識すべきだと思います。最後に、これまで長い間、大変御世話下さった宇治先生に感謝すると共に先生の御健康と御多幸を御祈りしたいと思います。

りますが、それが合宿においてもよくうかがわれます。合宿が年中行事中、重要な一つであり、充実したのようになってきていることは大変嬉しいことです。謡・仕舞の練習はもちろんのこと、上級生と下級生のミーティング。交流を深める楽しいゲーム・スタンツ・半日の旅。全体のミーティング(リポート報告)―ここにおけるサークル論の討議は、いろんな意見がだされませんが、むつかしいので、あちこちによつかり、時間が過ぎ、あれこれと思いながら、自分でもわからないままに終ってしまいがちですが―読書会(それからの人生についての話し合い)―もっともみんなで話し合いたいのに、遅くなり、規則にしばられて途中で断念せねばならないことは、私にとつてすごく残念なことです―このような多種多様なプログラムによつて合宿がすぎ去って行くのですが、ふだんあまり話せないような人、内容について話せることはとてもいいことです。マンネリ化に陥りやすい合宿を有意義に、楽しく送れることを願います。

コンクールを終えて

岩崎勝至

今年も例年のごとく十二月十六日、大槻能楽堂において謡曲コンクールが行なわれました。今年で十三回目、十四校の参加でした。我が校は、以前にも先輩が発表された「紅葉狩」を再度行なったのであります。結果は残念ながら五位までに入ることができなかつたのですが、出場者は皆、精一杯謡った満足感と共に大変良い思い

ヨーロッパムード
海に見える室内

あなたのオアシス

喫茶

ヴィオレッタ

阪急六甲山側
六甲センタービル(1F)

串かつ

入船

国鉄六甲道駅山側
TEL神戸(82)0519

喫茶
軽食

ベンガル

神戸市灘区六甲台町(神大前)
TE (87) 5622

風韻会のあしあと

- 3月2日(木)～9日(木) 春季強化合宿 於・和歌山県南部市 「紀南労務学園」
- 18日(土) 15回生歓送誼会 於・六甲台学生集会所 終曲後、平和楼にてコンパ。
- 4月8日(土) 柚木前学長追悼誼会 於・学生会館和室
- 29日(土) 学連月並会 於・学生会館ホール。
- 5月4日(木) 旧三商大同誼会 於・東京杉並能楽堂
- 12日(金) 大学祭前夜祭 於・国際会館
- 14日(日) 大学祭文総デー・サークル発表 於・六甲台講堂
- 〃 〃 宇治風韻会 於・大槻能楽堂
- 21日(日) 大学祭園遊会「猩々」開店 於・六甲台学舎前庭
- 6月2日(金)～4日(日) ジュニア合宿 於・摩耶山天上寺王蔵 蔵院
- 4日(日) 凌霄誼会 於・学生会館ホール
- 11日(日) 四大学交歓会 於・学生会館ホール
- 17日(土) 学連春季大会 於・山本能楽堂
- 7月2日(日) ジュニア祭サークル発表 於・学生会館ホール
- 7月中旬 文総リーダートレーニング 於・明石
- 8月26日(土)～9月1日(金) 春季強化合宿 於・綾部市
- 10月1日(日) 宇治風韻会 於・湊川神社
- 21日(土)～23日(月) 3・4年男子強化合宿 於・六甲台

- 11月18日(土) 第3回秋季発表会 於・学生会館ホール
- 19日(日) 教育学部赤塚山祭サークル発表 於・教育学部
- 26日(日) 宇治風韻会 於・大槻能楽堂
- 12月16日(土) 学連秋季大会 於・大槻能楽堂

昭和43年度新幹事紹介

- 幹事長 中島克己 教育学部支部
- 副幹事長 今宿純男 小川忠彦 チーフ 今宿純男
- 会計委員 菊地 汎 会計・サークル連
- 学連委員 西村登志子 梶川孝子
- 文総委員 北本幸仁
- 主要行事予定
 - 四月 新入生歓迎会・学連月並会
 - 五月 三大学(旧三商大)合同誼会(於・神戸大学)
 - 宇治風韻会・四大学交歓誼会・大学祭発表 模擬店「猩々」開店
 - 六月 関西学生能楽連盟春季大会・ジュニア合宿
 - 七月 ジュニア祭発表会
 - 八月 夏季強化合宿
 - 十一月 神戸大学風韻会定期発表会・宇治風韻会
 - 十二月 関西学生能楽連盟秋季大会(附・連吟コンクール)
 - 三月 春季強化合宿

幹事長就任にあたって

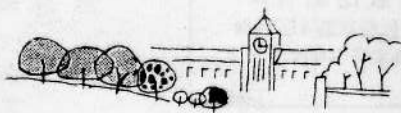
中島 克己

風韻会幹事長という大役を今度、まかされることになったわけですが、特に今年の幹事学年の人数的問題から、種々の難問が起こるのではないかと内心不安に感じているわけです。そういう面からも、まず同輩諸氏はもちろん、先輩の方々、後輩の皆さんの御協力と積極的な会の活動への働きかけをお願い申し上げます。

例年の事ながら古典芸能の特殊性とクラブ活動のあり方が論議されております。しかしまず、サークルあつての謡曲、仕舞と考へ、数多い大会や発表会のための厳しい練習の中にも、できる限りの対話の機会を持ちたいと考へている次第です。そこからサークル員相互のコミュニケーションをはかり、サークル活動の方向性を各々が討議なりして、常に意識できるようにになれば幸いと思っております。

次に、風韻会における諸活動は往々にして幹事学年だけの更い言えば、幹事長だけの意志決定によって行なわれることが多分にあつた様です。それというのも会員の活動に対する盲目性によるところが大きかつたのではないのでしょうか。その意味でも、まず不満なり意見なりは卒直に申し出て頂き、更に必要があれば、全体討議という形に持って行ければと存じます。

とにかく困難な事には違いありませんが、常に全体の意志を反映したサークルにしてゆきたいと思ひます。皆さんの積極的態度と先輩諸氏の御指導を心より御願ひします。



風韻 編集後記

風韻は誰のもの

本来、我々が我々の目的のために発行するはずの「風韻」がいつの間にかその性格をあいまいにし、本来の目的から離れてしまった様に思える。

今回は三十五周年を機会に、従来の編集から脱皮し、この「風韻」を身近なものにすべく努力した。まず内容・編集の点であるが、各個人の投稿のみならず、間接的であるが、全部員の「結果」である。個々の内容からいくと、「サークル論」においては、新たなサークル発展のため、我々がおちいりがちなサークルに対する安易な、妥協的な態度に対する警告として（二三年生共同レポート）、又私達が日頃主張している能楽研究を推進する為のレポート（一年生共同）を組んだ。又全員で広告を取りました。

今年新たに広告を掲載することにしたのは、主に財源的理由からである。「風韻」の発行費は先輩からの寄付金が大部分であられていた。その為、先輩の活動援助資金が、ともすれば有効な働きをなしてはなかつたきらいがある。内容を充実させ（サークル活動の一環としてとりあげる）、広告を載せることにより、余裕が生じた部分を他のより建設的な部門へ有効に投入されることを期待する。

今回の編集の問題点は、完全に従来の形式から脱皮していない点があげられる。次回編集者の配慮と勇断を期待します。次に、先輩の「投稿」がいつも同じ人になることである。その点、諸先輩方の御理解を望みます。それから、原稿の提出が非常に遅いが皆さんの御協力をお願いします。

最後ですが、投稿下さった方々、どうもありがとうございました。

(K・U)

昭和43年2月20日 印刷
 昭和43年2月25日 発行
 発行所 神戸大学風韻会
 神戸市灘区六甲台町
 印刷所 青野出版印刷KK
 神戸市灘区將軍通4丁目84
 電話☎4089☎2838

<p>喫茶 フローレンス</p> <p>神戸市灘区阪急六甲駅 山側</p>	<p>中華料理</p> <p>六甲苑</p> <p>神戸市灘区宮山町2丁目42</p>
<p>お好み焼</p> <p>山麓</p> <p>六甲登山口 電話☎3062</p>	<p>ビリヤード</p> <p>六甲山</p> <p>阪急六甲駅山側</p>
<p>料理仕出し すし</p> <p>御影市場東入口</p> <p>魚勝</p> <p>テーブル席を 御利用下さい</p> <p>電話☎3471番</p>	<p>お好み焼・焼ソバの店</p> <p>三宅</p> <p>阪急六甲山側</p>
<p>中華料理</p> <p>来来</p> <p>阪神御影ガード下</p>	<p>阪神会館ビル</p> <p>1F パチンコ 2F マーじゃん ビリヤード</p> <p>阪神御影駅浜側</p>